

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成20年8月 第90号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 認知症の人が住みよい街へ

国は平成17年より、認知症になっても安心して暮らせる町をつくる為に、全国で100万人の認知症サポーターを養成する運動を始めています。

当施設でも、7月25日の「介護者の集い」を、『第1回認知症サポーター養成講座』として市社協との共催で行い、100人を超える参加者がありました。何人もの参加者から活発な発言があり、関心の高さが伺えました。多くの方が、自分の問題としても、親の問題としても、非常に高い関心を寄せている事は事実です。しかし、世間の方が現実の暮らしの中で認知症の人と接する時、その許容量は驚くほど少ない事に気づきます。

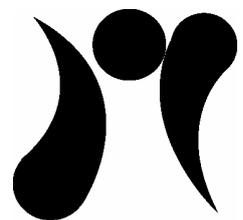
ごく最近の出来事2例を紹介します。

特養の利用者で97歳の女性が、毎日何回も外出されます。最近ではおぼつかない足取りで、小幅でバランスを取りながらチョコチョコ歩かれます。車道も横断されますので、運転者にとってはこの上なく迷惑です。概ね、職員が少し距離を置いて後ろから付き添い、疲れた様子が見えたところで誘導して帰ってもらいます。ごく最近、迎えに行った職員に、「迷惑しているので園から出ないようにしてほしい」との要望がありました。運転者ではなく、直接の接点が余りない近所のおばあさんからでした。

隣接するバリアフリーマンションに80歳の男性が引っ越して早々、娘の家に帰ろうとしてその隣の家に入り込み、其処でのやり取りに満足できずに悪態をつきました。隣人からは、「カギの掛かる部屋に入れて欲しい」と強く要望されました。その夜、今度はマンションの中で、自室や廊下に置いてある物を壊し、他の部屋を訪問しました。何人かの住人には不安感が強く、「カギをかけておいて貰わな」「何で我慢せならんの」と同居への拒否反応があり、その翌日その男性は、娘さんが付き添って精神科病院を受診し、入院しました。

(次ページにつづく)

せいりょう園 渋谷 哲



(前ページのつづき)

近隣の人々の意識の中に、特養には当然に「カギの掛かる部屋があるもの」との常識が蔓延している事に気づきました。そして徐々に悪化する認知症について、付き合い方を工夫できない人々が世間の多数である事を、改めて実感しました。その一方で、認知症になっても他者を巻き込まないで暮らせる生活力を身につける必要性を強く感じました。認知症初期の不安感を、自らの力で癒す為の心の拠り所が必要なのだと実感します。老いを迎える準備が大切なのです。

許容すべき行為が生じない社会が理想かも知れませんが、4世代の人々が共生し、多様な価値の共存する現代社会の、現実的な課題として、老いと死、病気、障害、非行、犯罪、等々好ましく無い事柄とも、適度な距離でお付き合いをしなければなりません。それは、自分の問題として生じる場合もあれば、他者の問題の場合もあり得ます。その為の適度な許容量が今、自分自身にも、地域社会にも、求められているのです。

世間の常識から少し外れた行動をする認知症の人が引き起こす騒動は、世間の許容量を測るバロメーターのようにも感じます。

老いは、避けられない死への準備期間であり、避ける努力以上に、死に向けての準備が重要です。準備の過程には、思想や宗教や芸術といった人間のみが持つ精神的な創造力を育む体験が潜んでいます。介護は、遺伝子では伝えられない貴重なメッセージを秘めた、最も人間的な行為なのです。

認知症を患い、要介護になり、最期を迎える暮らしを地域社会の中で実現する事が、コミュニティケアの主眼です。認知症の人は、「ベストを尽くす」という、人として誰にも共通する最も尊い姿を表します。その行為の結果は少々の騒動を引き起こすとも、宿命を背負う覚悟の姿が、次世代の人々への強いメッセージとなり、本能への意欲と豊かな創造力を育むのです。

老いと死と認知症の人を受け止める適度な許容量のある社会にする事が、少子化対策の根源である事を実感します。そしてまた、認知症になっても他者を巻き込まずに暮らせる生活力を身につける準備も重要です。双方向からの取り組みを企画して、認知症サポーター養成講座を引き続き開催したいと考えています。

## せいりょう園待機者状況

＜平成20年 8月19日現在＞

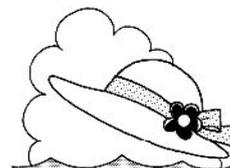
○判定済み者 267名の内訳

Iグループ…100名  
IIグループ…108名  
IIIグループ… 53名  
死去…6名



○判定済待機者 261名の内訳

在宅…99名  
特別養護老人ホーム入所中…5名  
老人保健施設入所中…83名  
医療機関入院中…62名  
ケアハウス入居中…4名  
グループホーム入居中…7名  
有料老人ホーム入所中…1名



認知症サポーターを志す皆様へ

老いる過程で、機能障害を起こし、認知障害を起こし、やがては死を迎えるのは、自然の摂理であり、人にとっての宿命です。障害や死を避けたい、認知症にはなりたくない、と願う気持ちは誰にもある素直な感覚ですが、避けられないのが現実です。適当な時期に覚悟を決める事が、宿命を背負う高齢者の役割です。要介護の期間は、老いて死と向き合い覚悟を決めて行く過程として、個人的にも社会的にも、重要で必要な時間です。

個人的には、最も自然で最も安楽で苦痛のない最期を、主役として迎える為の準備期間です。穏やかで安らかな死顔に出会えます。

社会的には、宿命を背負う覚悟の姿を次世代の人達に見せて、本能としての『種の保存』や『生命力』への覚悟につなぐ役割を担います。少子化対策の根源的な役割です。

街を歩き回る認知症の人は、結果は上手く行かなくとも、ベストを尽くして懸命に歩きます。ベストを尽くす姿こそ、人として最も尊い姿です。野茂やイチローや植村直己にも通じるチャレンジャーなのです。

2008年7月25日 せいりょう園 渋谷 哲

### ケアハウス等空き情報

<平成20年8月13日現在>

- ・めぐみ苑 : 1 人部屋 3 室
- ・シスナブ御津 : 1 人部屋 1 室
- ・清華苑ソバライフ : 1 人部屋 1 室
- ・キャッシル真和 : 1 人部屋 2 室
- ・志深の苑 : 1 人部屋 1 室
- ・ウェルソグ はりま : 2 人部屋 1 室
- ・恵泉 : 若干

- ・香楽園 : 1 人部屋 1 室  
: 2 人部屋 2 室
- ・青山苑 : 1 人部屋 2 室  
: 2 人部屋 1 室
- ・保月の郷 : 1 人部屋 2 室  
: 2 人部屋 1 室
- ・第二ケアハウス恵泉 : 若干

**【問合せ先】せいりょう園介護相談室 TEL(079)421-7156/(079)424-3433**

### \*\* せいりょう園 8月の行事 \*\*

- 8月1日(金) ひよひ手芸教室
- 8月8日(金) 夏祭り
- 8月9日(土) ハワイアンフラダンス
- 8月13日(水) お盆の法要
- 8月16日(土) 園長との懇談
- 8月18日(月) 美容の日



地域の方が暑い中、野口太鼓と音楽に合わせて踊っていただきました



- 8月22日(金) 介護者の集い  
～テーマ 私が思う虐待、  
みんなが思う虐待～
- 8月25日(月) 理容の日
- 8月28日(木) 尺八演奏会
- 8月29日(金) ひよひ手芸教室

\*\*\*\*\*

## 第10回地域リハケア海外セミナー2008年

### 「デンマークにおける地域リハ」 —シリーズ3

地域支援センターのぐち南 社会福祉士 吉田 知一



スコウブリューネットリハビリ専門センター

スコウブリューネットリハビリ専門センターは、病院から退院し在宅に戻るまでのリハビリセンターで、通所のデイケアもあり老人保健施設のような場所だといえます。入所者は2週間・4週間・6週間の入所プランがあり、本当に入所が必要な方かどうか判定委員会を設けているそうです。職員はPT9名、OT6名、ヘルパーと看護師合わせて20名、部屋は全20室で機能向上の為のリハビリを行い在宅復帰を目指しています。

リハビリの処方方は医師が出しますが、リハビリを受けるかどうかは本人の判断で自己決定してもらいます。病院から退院後、3日以内に本人からセンターへ連絡し、退院後から10日以内に初回利用しなければリハビリを受けることが出来なくなるそうです。中には高齢でリハビリをする段階ではない人もいるので、その見極めも専門職に必要なことだといえます。その人が出来ないことが出来るようになるということは、本人の自己実現はもちろんですが、それ以後介護の手間もなくなり社会全体に貢献していることになる、とおっしゃっていました。リハビリをする上でもっとも重要視していることは、障害の受容だそうです。



その為にモチベーションを高めるのもPT、OT、STの仕事だといえます。

基本的なリハビリの内容は、個別トレーニング・グループトレーニングを組み合わせで行っています。PTは症状別のトレーニングを行い、本人の生活の動きもアクティビティの一環として考えています。ヘルパーが訪問介護の時も機能保持のカリキュラムを行っており、関係する専門職が情報の共有をすることでリハビリについて高い意識を持つことが出来ています。



多くのリハビリの取り組みや器具を見学させてもらいましたが、興味を持ったのはキッチントレーニングです。リハビリには他人の力を借りずに生活する、という目的があります。デンマークの方々の朝はコーヒーを飲むことが一般的で、コーヒーを自分で淹れることが出来るかどうか重要になってきます。台所や椅子、テーブルなどどのような障害にもあわせられるようにカスタマイズ出来るものが置いてありました。これを元に自宅で住宅改修する際の目安にするのだといえます。



キッチントレーニングの部屋

続いて、ヒレロド市の健康福祉課リハビリ部門を訪問しました。デンマークの福祉サービスは市が運営しています。スコウブリューネットのようなリハビリセンターから在宅に戻り、さらに自宅でもリハビリが必要な方の為に訪問リハビリを行っています。在宅での訪問リハビリの成功事例として紹介してもらったのがオーレさんの事例です。





オーレさんは左官工をされていた54歳の男性です。脳卒中で半身麻痺、言語障害が残りしました。病院に2ヶ月入院し、リハビリセンターに1ヶ月入所を経て在宅に戻ってきました。しかし、喪失感が強くうつ病を患ってしまい生活意欲が減退します。OTのマリアヌさんはモチベーションを高める為家庭訪問を頻繁に行い、彼のことを良く知ろうとしました。

OTのマリアヌさん、PT、ST、臨床心理士、ヘルパーなどとカンファレンスを何度も開き、利用者も共にテーブルに座ってもらいました。ここでは中心になるのは利用者ではなく、目標・ニーズが中心になり、その周りを本人を含む、関係する専門職で向き合うイメージとのこと。自殺願望もある方だったので精神病院とも連携しました。

その後、本人への支援開始。最初の2週間は毎日利用してもらいました。補装具の着脱を自分で出来るように改良。自分で紐を結べるように特訓する。麻痺もあるが、脳の損傷した箇所が悪かったのかバランス感覚、距離の感覚がありません。初めは服を着るのに3時間かかりました。

しかし、3ヶ月後には自分で服を着替え、スクーターで買い物ができるようになりました。今は自分の趣味を持ち、デジカメの講座などに参加しているとのこと。さらに「障害者の職人集まれの会」の会長に就任し、現在は健康福祉課の利用者登録を外れているそうです。



オーレさん（45歳）



オーレさんには次の目標があります。実は娘さんが結婚して家を建てるそうで、昔の左官工の腕がうずうずしてしまい、家を建てるアドバイスをしたいそうです。そのためには電車に乗って、離れた娘宅へ一人で行くことが出来るようになるのが今の目標だそうです。



電動車椅子に乗ったオーレさんと  
ポケットに手を入れたマリアヌさん

左の写真でマリアヌさんの姿を見てください。この写真は、半身麻痺のオーレさんが電動車椅子に初めて乗ったというシーンです。転倒してしまうかもしれない、とつい手を差し伸べてしまいそうな場面です。しかし、マリアヌさんはポケットに手を突っ込んで指示しているだけです。これは決して寒いからポケットに手をいれている訳ではなく、マリアヌさんはあえてこうしているのだと言います。「私はあなたの力を信じています、あなたを尊重しています、だから自分の力で運転してください」と。それが、本当のやさしさであると、人から逃げていない、人と向き合っている介護なのだと感じました。福祉の先進国は決して人にやさしい国ではなく、むしろ人に厳しい国で、それが本当の意味でやさしいのだと思いました。

さて、シリーズ1でも紹介させてもらった、デンマークが世界で最も幸せな国であるという理由ですが、私が今回の研修を通して感じたことは「デンマークの人達は皆、納得して生きている」からではないか、ということです。デンマークの人たちは皆、納得するまで話し合いをします。価値観が違っている者同士がお互いを尊重し合い、大切なことは何かを話し合えるのです。この背景には、デンマークの徹底した「対話の教育」が関係しています。我が国はいじめ・不登校・学級崩壊が各地で起きていますが、デンマークではそれらの問題はあまりないそうです。デンマークでもけんかや仲間はずれは当然ありますが、話し合い・対話で解決する習慣が根付いているのです。小学2年生までは「読み・書き・計算」には重きをおかず、中学2年生まではテストや評価も行っていない。義務教育では考えることを求められます、聴くということ・自分の考えを表現すること、これに重きを置いているのです。授業も対話、会話形式で「対話の教育」が徹底されているそうです。生きた言葉による「対話」こそ教育の





生命線であると考えているようです。自分自身が納得するまで話し合える環境がある、だからこそ自己決定、自己責任、自己実現が出来る国なのだと。この考え方は、障害に対する受容や積極的なリハビリに繋がっているものだと考えます。



ニコライ・グレントヴィ

では、この対話の教育が今に至るまでどのような経緯をたどったのか、それは、デンマークが世界に誇る教育者「国父」として慕われているニコライ・グレントヴィ (1783~1872)の功績が多大な影響を与えています。有名な童話作家アンデルセンの同時代人で、彼とは友人関係にありました。国際的にはアンデルセンやケルケゴールの方が知られていますが、デンマークではグレントヴィが一番尊敬されています。それは彼こそが近代のデンマークのあり方を決め、デンマーク精神の父とも呼ぶべき存在だからです。

1814年ナポレオン戦争においてデンマークは敗北し、スウェーデンに領土を奪われ、戦わずして降伏しました。ただし、デンマークの多くの人達は生き残ることが出来ました。グレントヴィは「人こそがデンマークの財産である」と民衆を勇気づけ、その後の復興の原動力となったという話があります。

そして、人を育てることを大切とし、国民高等学校を創設しました。彼は当時、民衆を軽蔑し虐げる保守的・権威的な聖職者らから民衆を守り、自立させるために「対話の教育」を説いたのです。

グレントヴィは既成の学校が無意味な暗記、試験、理念のない実学教育、立身出世をめざす競争を施しているとして、それらを「死の学校」と呼びました。彼は教え導くという言葉を嫌い、教育とは本来「生の自覚」を促すものだと考えました。—「生きた言葉」による「対話」で、異なった者同士が互いに啓発しあい、自己の生の使命を自覚していく場所が「学校」であるべきなのです—

グレントヴィの思想は「民衆の自覚」としてデンマークの教育と市民運動の中に今でも生き続けているのです。試験も資格も問わず、学びたい者が自由に学べるのは、現在のデンマークの学校がそうですし、学ぶことが無料であるのも、この精神が根底にあるからでしょう。だからこそ、デンマークの人達は自分達のことは対話で解決します。介護職が起こしているストライキは自分達が納得するための「対話」なのです。デンマークの社会保障が素晴らしい訳ではなく、そのシステムに皆が納得しているだけなのです。納得して高い税金を払っているのです。人が財産であるという考えから、税金の使い道も日本のように物ではなく人に使われます。デンマークの使用している通貨はユーロではなくデンマーククローネという通貨です。これも国民投票で決められたことです。原子力発電ではなく風力発電なのもそうです。風力発電は今ではデンマークの代表的な輸出産業となっているそうです。価値観が違っていても、その違いを尊重し、多くの国民が大切なことは何かを話し合い、納得して決められているのです。だからこそ、オーレさんの事例にあったように、障害を持っているということを尊重出来る環境で、障害と向き合い受容することが出来るのかもしれない。

そして、幸せな国であるもう一つの理由が、働いている者が心身共に健康で幸せに働くことが出来なければ、他人も幸せに出来ない、というデンマークの働く人の立場に立った考え方です。あらゆる職場には労働監査局から監査が入り、満足して心も体も健康に仕事出来る環境であるか徹底的に調べるそうです。健康を害するような仕事は認められません。だからこそ、心身共に健康で働くにはどうしたら良いか、納得して働けるにはどうすれば良いか、ということらを皆で話し合います。これは、自分達の仕事が健康に働くことが出来る職場であると社会に認めもらえる為にも、働いている職員一人一人が主張を持ち、話し合える環境にあるということなのだと思います。

私は、今回の研修で初めて日本以外の国へ行かせてもらいました。見る物すべてが新鮮で感性を揺さぶられる体験をすることが出来ました。外国から自分の住んでいる日本を見た時に、今まで当たり前で自然だと思っていたことが、実は当たり前ではなく不自然なことであることに気づかされました。しかし、それでも私は、日本が好きです。デンマークと日本、どちらに住みたいかと聞かれれば、どんなにデンマークが幸せな国だと言われても、やっぱり日本に住みたいと思います。日本にいても外国にいても、納得するのも幸せだと感じることも自分自身の感性によるものだと思います。

このような経験が出来て本当に幸せだと思いました。たくさんのことを学んで知って、今後の仕事に活かしていくことが出来るように一生懸命がんばりたいと思います。ありがとうございました。



## アクティビティの紹介

老いの過程で人は、身体機能や精神作用が徐々に低下し、様々な事柄が出来なくなります。しかし、知性や理性や体力は衰えるとも、季節の移ろいや周囲の変化・雰囲気、五感や第六感で感知し、感性・感覚・感情で生活を実感して、懸命に暮らします。生活者として蓄積してきた感性や感覚の働きで、充実感のある暮らしを実現しています。

五感を磨き、感性や感覚を研ぎ澄ます事が、お年寄りにも介護者にも、とても大切になります。五感に働きかける様々な機会を提供したいと願っています。

## 造形教室

～手作り粘土を使った創作～

### 活動場所

第1金曜日	せいりょう園デイサービスセンター
第2金曜日	せいりょう園グループホーム
第3金曜日	せいりょう園グループホームまどか
第4金曜日	せいりょう園グループホーム

陶芸家 喜多千景先生の下、毎週金曜日に手作り粘土を使った創作活動が行われています。

今回紹介するのは4月に開催された活動で、参加者はグループホームに住んでおられる方々です。テーマは季節にあったもので、手首や指先を使いながら「こねる」「丸める」「つまむ」といった作業を行い、先生の作品を見本にして、自分で造ります。＜材料は小麦粉・強力粉・食紅 サラダ油を混ぜ手で捏ねて作った物で、口に入れても害のない手作り粘土です＞

### ◆開始◆



◎作品の右左が判らない方や、色や形の判別が出来ない方もおられますが、その方が今出来る事をして頂いています。その方の今の状態を違った面から見る一つの場面でもあります◎



先生にお話を聞きました！

認知症の方に何かを伝え、同じ事をしてもらうのはとても難しいです。また、手先が器用な方・1つ1つこだわりを持って作業される方・耳が聞えにくい方・2

色までは判断出来るが3色になると分らなくなる方など参加者は様々で、テーマや趣向を凝らすも前回参加した内容や参加した事自体覚えていない方もおられます。でも、どの方も毎回必ず参加されます。そして、それぞれの作品には個性がありいつも刺激を受けます。

### ◇いろいろな「こいのぼり」が誕生しました◇



☆先生ならびに参加された方々 ご協力ありがとうございました☆

# 介護現場発信情報

～かけがえのない<sup>ひととき</sup>一刻を～

## ユニット池の向三丁目リーダー

齊藤まゆみ



ユニットケアが始まり1年が経ちました。

始まった当初はバタバタしており、慣れない環境の中職員も入居者も戸惑うことばかりでしたが、今では随分落ち着いてきたように思います。

ユニットへ移られてから、一人一人個別ケアをおこなうようになり、入居者の方のペースで生活できるようになった為、個性も強く出てきたように思います。従来型に居た時は、日中寝て過ごされていた方もユニットへ移られてからは毎日のようにユニット内を散歩されています。またユニットの外へ散歩にいかれる方もいらっしゃいます。

居室が個室であること、ホールが居室に近いということも入居者の方のペースで生活することの利点だと思います。その一方で、個室や一人で過ごすことに不安を感じて落ち着かない方もおられ、その方々に対するよい介護方法を見つけることが課題としてあります。

ユニット型へ移ってから入居者の方の生活が一番変わったのですが、私自身変わったと思うことは、ご家族へ状態報告をする機会が増えたということです。従来型に居た頃は相談員や主任・副主任が主にご家族への状態報告を行っていたのですが、ユニット型ではどの職員もご家族への状態報告を行います。またご家族も相談員、副主任だけでなく職員にも状態を尋ねてこられます。今まで以上に入居者の方の状態を把握し、いつ聞かれてもしっかり答えられるように努めていき、これからも入居者の方がその人らしい生活をユニット内で行えるよう援助していきたいです。

入居者の方ご家族とも深い信頼関係が築けていければと思います。

## <平成20年度第1回グループホーム 運営推進会議の報告>

日時) 平成20年6月14日(土) 14:00~16:00

場所) せいりょう園 1F ホール 参加者) 推進委員 8名 入居者家族 5名

議題 1. 平成19年度事業報告(資料配布)

2. 行事報告 介護者の集い、2市2町グループホーム協会総会の案内

3. 新人職員研修受け入れ実績

4. 事故報告 グループホームまどか: 内山氏、グループホーム: 堂口氏

5. 「日本人とアイデンティティ」の文章をもとに園長の話  
榎山節考と現代の老人について、後期高齢医療制度について

6. 意見交換

[入居者の外出の対応について]

・認知症になっても1人の人間として社会人として生きる権利がある。

・自身が認知症になっても行動を制限された生活はしたくない。

園長より 認知症という理由だけで社会人としての普通の行動を制限されることがあってはいけない。生きる権利と自己責任はどうするのか社会全体で考えていく必要がある。

[親を入居させている家族の想い]

ある家族からの投げ掛け 母親を入居させているが自分が楽をする為に捨ててしまったという罪悪感がいまだに拭ききれないでいるが他のご家族はどう思っているのか。

参加家族からのメッセージ

・要介護度が高くなると一人で介護するのは無理と考えた。今の状態がベストであると自身に言い聞かせている。

・お互いに良い距離感が持てて良かった。

・自身も悩んだ時期があったが年月が解決してくれる。

・離れて暮らすことで優しくなった。

・嫁の立場では入居を勧められなかったが実の娘が入居を賛成してくれた。

園長より 高齢になり認知症や障害を持つと社会にでる機会がなくなりがちである。他者との関係を持続しながら生活をしていけるのが施設の良い処と考えている。